

Ⅲ 水稻奨励品種およびその他品種の特性概要

1 特性一覧表

熟 期	品 種 名	来 歴	草 型	出穂期 月. 日	成熟期 月. 日	稈長 cm	穂長 cm	穂 数 本/m ²
早 生	コシヒカリ	農林22号 × 農林1号	中 間	7. 25	8. 28	92	18. 6	411
	キヌヒカリ	(収2800×北陸100号)F ¹ × 北陸96号(ナゴユタカ)	偏穂重	7. 27	8. 31	79	17. 7	394
	(指定) レーク65	ヒノヒカリ×キヌヒカリ	中 間	7. 25	8. 30	73	17. 5	433
中生の早	ゆめおうみ	越南135号×滋系51号	中 間	8. 2	9. 6	69	18. 6	392
中生の晩	日 本 晴	東海7号(ヤマビコ) × 中新110(幸 風)	中 間	8. 7	9. 10	81	19. 3	406
	秋 の 詩	滋系54号(吟おうみ) × コシヒカリ	中 間	8. 9	9. 15	89	19. 6	413
	吟 お う み	西海146号 × 西海144号(ヤマチカラ)	中 間	8. 9	9. 14	82	20. 0	400
	(特定) 玉 栄	山 栄 × 白 菊	中 間	8. 5	9. 12	81	19. 9	414
晩 生	(特定) 滋賀羽二重糯	改良羽二重糯の系統分離	偏穂重	8. 13	9. 18	103	22. 2	393
	(特定) 吟 吹 雪	山 田 錦 × 玉 栄	偏穂重	8. 13	9. 20	80	19. 6	381
極 早 生	(その他) ハナエチゼン	越南122号×フクヒカリ	偏穂数	7. 18	8. 21	75	18. 8	432
	(その他) あきたこまち	コシヒカリ×奥羽292号	中 間	7. 20	8. 24	84	18. 9	412
	(その他) ひとめぼれ	コシヒカリ×初星	偏穂数	7. 24	8. 28	82	19. 3	443
晩 生	(その他) ヒノヒカリ	愛知40号(黄金晴) × コシヒカリ	中 間	8. 13	9. 19	83	18. 8	403

注) 1 : 数値は2004年から2008年の奨励品種決定調査試験の平均値で、5月10日頃植(中苗・80g/箱)

2 : 外観品質は数値が小さいほうが優れ、概ね4.5～5.0が1等の下限、6.0が2等の下限

3 : 心白・腹白の多少は、無<稀<微<少<中<多<甚の順に多くなる

4 : 脱粒性・穂発芽性は、極易<易<中易<中<中難<難<極難の順に強くなる

5 : 耐倒伏性・耐冷性・耐病性は、極弱<弱<中弱<中<中強<強<極強の順に強くなる

精玄米重 kg/a	玄米千粒重 g	外觀品質 1-9	心白の多少	腹白の多少	食味	脱粒性	耐倒伏性	耐冷性	穂発芽性	耐病性				備考	奨励用品年種等
										葉いもち	穂いもち	白葉枯病	紋枯病		
56.7	21.2	5.1	微	稀	上上	難	弱	強	難	弱	弱	中	中		昭35
56.1	21.5	5.7	微少	稀	上上	難	強	一	中易	中弱	中弱	中弱	中		平 3
56.2	22.3	4.7	微	稀	上上	難	強	一	極難	中	中	中	中弱		平17
56.1	22.9	6.0	微	微	上中	難	強	一	難	強	強	中弱	中		平13
58.4	22.5	4.7	微	微少	上下	難	中	一	中	中	中	中強	中		昭40
62.9	23.2	4.4	微	微	上上	難	中弱	一	難	弱	弱	中	中		平13
63.7	25.3	5.2	微	微	上下	難	中強	一	中易	中強	中強	強	中	酒造原料米	平 3
59.2	28.2	6.6	中	少	一	難	中弱	一	中易	中	中弱	中弱	中	酒 米	昭41
57.2	22.2	5.9	一	一	上上	中易	弱	一	極易	弱	弱	中強	中	糯 米	昭14
57.1	25.0	4.5	多	微	一	難	中	一	中易	中	中	中強	中	酒 米	平13
53.2	22.6	5.5	稀	微	上中	難	中強	中強	中難	中	中	中弱	中弱		
53.1	21.5	5.6	稀	稀	上上	難	中弱	中強	中難	弱	弱	中弱	中		
55.5	21.9	6.4	稀	微	上上	難	中弱	極強	難	中弱	中弱	中弱	中		
51.6	20.9	5.1	微	稀	上上	難	中強	一	極難	弱	弱	中弱	中		

2 品種の特性概要

① 奨励品種等

ア コシヒカリ

県内の平坦～中山間の地力がやや低～中程度のほ場に広く適する。いもち病に弱いので多発地での作付けは避ける。

育苗にあたっては、発芽が遅いので十分に浸種・催芽を行ってから播種をする。

穂数がつきにくいので良苗育成により穂数確保に努める。多肥による穂数確保は倒伏の危険性が高いので避ける。稈が長くやや柔らかいため倒伏しやすいので、穂肥の施用量および時期に注意して完全倒伏を防ぎ、稲体がなびく程度に作り上げるのが良い。

また、登熟期間の高温によって乳白が出やすいので、温暖化対策技術を組み合わせて栽培する。

イ キヌヒカリ

地力が中程度以上の乾田に適する。分げつの発生が少なく穂数は少な目となるので、地力の低いほ場での栽培は避ける。

乳白・心白がでやすいので、幼穂形成期前後から受光態勢を乱さないよう肥培管理に留意するとともに、温暖化対策技術を組み合わせて栽培する。ただし、高温年には温暖化対策技術を組み合わせても品質低下が懸念されるため、毎年品質が良くない地域では「秋の詩」や「レーク65」等への品種転換を検討する必要がある。

また、穂発芽しやすいので成熟期が秋雨に遭遇する地帯での栽培や刈遅れは避け、高温多湿時にはやや早めに刈り取りを行う。

ウ レーク65

地力が中程度以上のほ場に適する。地力の低いほ場では、初期生育が確保できず減収するので栽培を避ける。生育期間全般を通じて「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」より葉色がやや濃く推移し、幼穂形成期においても「キヌヒカリ」より濃い穂肥は籾数確保のため出穂25日前(幼穂長1 mm)に施用する。

短強稈で葉が直立し株が開張しないため受光態勢にすぐれるが、紋枯病に罹病すると上位進展しやすい。いもち病抵抗性は「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」より強いが、十分ではないので、常発地では注意する

高温年でも乳白・心白の発生が少なく玄米の外観品質は安定して良いが、茶米や黒点症状米が発生しやすい。茶米や黒点症状米の発生を減らすため、可能な限り出穂前後各3週間程度は常時湛水を保ち、その後も収穫直前まで間断かんがいを行う。また、茶米・黒点症状米の発生が多い場合は、2.0mmの網目を使用したり、色彩選別機を用いて、1等米に調製する。

エ ゆめおうみ

地力が中程度以上のほ場に適する。倒伏の心配はないが、早植や多肥栽培で籾数が極端に増加した場合や早期落水をすると腹白、死米が発生し、外観品質の低下を招くことがある。

「日本晴」より明らかに優る極良食味の品種特性であるが、多肥栽培によって米のタンパク質含量が容易に高まるので、肥料は本指針の施肥基準に基づき施用する。

いもち病には強く、常発地以外で防除の必要性は少ないが、幼苗では抵抗性が十分でないので、苗や移植直後に発生した場合速やかに防除する。

休眠が深いので、育苗にあたっては浸種・催芽を十分に行い播種する。

オ 日本晴

県内の平坦～中山間の地力が中程度以上のほ場に広く適する。湿田では、根腐れによって、穂数や一穂籾数が減少し、収量が低下する。秋落ちしやすい水田では、ごま葉枯病や穂枯れが出やすく、品質・収量が低下するので、作付けにあたって有機物を施用するなど土壤改良が必要である。

極多肥や多肥・密植にすると稈の伸びが大きく草勢が悪化し登熟が劣るので避ける。

穂発芽性が十分でないため、極端な早植えや生育期間の高温によって生育が早まり、成熟期が秋雨時期と重なると穂発芽するので注意する。

カ 秋の詩

県内の平坦部に広く適するが、いもち病に弱いので常発地での作付けは避け、倒伏の恐れがあるので、大豆跡や野菜跡に作付けする場合は注意する。

肥沃地では倒伏の危険性が高まるため、施肥量と施肥時期に十分注意する。地力の低い地帯では、生育中期に栄養凋落を起こすと籾数不足となるので、つなぎ肥を考慮する。

休眠が深いので、育苗にあたっては浸種・催芽を十分に行い播種する。

食味は、粘りが強く「日本晴」より優り、「コシヒカリ」並みの極良食味である。

刈遅れは、胴割れの増加をきたすので、適期収穫を心がける。

キ 吟おうみ

平坦部の地力が中程度～やや秋落ち田に広く適する。主に酒造原料米(掛米)として利用される品種である。

初期生育が旺盛なため、基肥はやや減量するとともに健苗育成に努め、茎数過多とならないよう留意する。追肥は最高分げつ期に施用し、茎数が確保しにくい場合は7日程度早める。つなぎ肥は施用しない。穂肥は遅れると玄米のタンパク質含量が増え酒造適性が低下するので適期に施用する。

刈遅れは、玄米光沢の低下と、茶米の増加をきたすので適期に収穫する。

ク 玉栄

主に湖南・湖東平坦部の地力が中程度～やや秋落ち田に適し、強度の秋落ち田、強湿田には不適。穂数過多になりやすいので基肥はやや減量し収量・品質が低下しないよう注意する。穂肥は適期に適量を施用し、それ以降の施肥は酒造適性の低下につながるのを避ける。

また、早期落水は、品質低下の原因になりやすいので避ける。なお、酒米は胴割れの発生を極力防ぐ必要があるため、適期刈り取りを行うとともに、乾燥途中（乾燥機の表示水分16%）で乾燥機を止めて、8～10時間のテンパリング後に仕上げ乾燥を行う。

ケ 滋賀羽二重糯

県内の平坦部に適するが地力の低いほ場には不適である。倒伏しやすいので施肥は控えめとする。また、いもち病の防除を徹底する。

本品種は晩生であるため移植から幼穂形成期までの栄養生長期間が長い。したがって茎数確保のための基肥増施や早期追肥による生育の過繁茂を避けつつ、幼穂形成期前に極度に葉色を落とさないよう稲体の栄養維持に留意する。

なお、前年にうるち種が栽培されていると漏生籾からの裸地(自然)生えが発生するので、出穂前に2回程度抜き取りを行い、うるちの混入を防止する。また、逆に本品種を作付けし、翌年にうるち種を作付ける場合も同様にもちの混入に注意する必要がある。

コ 吟吹雪

県内中南部の地力が中程度以上のほ場に適し、地力の低いほ場には不適である。また、県内北西部などの秋冷が早い地域では登熟ムラを生じることがある。

茎数は比較的とりやすいが、最高分げつ期から幼穂形成期までの期間も長いので、この間に栄養凋落を起こすと大きく減収する。生育中期の栄養を維持し、7月上旬の葉色が葉緑素計で40(葉色板で4.5)を下回らないように、必要に応じてつなぎ肥を施用する。穂肥は出穂前25日に適量を施用し、以降の施肥は酒造適性の低下を招くのを避ける。

また、胴割れの発生を極力防ぐため、出穂後の水不足に注意し、早期落水を避けるとともに適期刈り取りに努める。

② その他品種

ア ハナエチゼン

地力が中程度以上のほ場に適し、地力の低いほ場には不適である。出穂期が早いので、適期に遅れないよう穂肥を施用する。

いもち病真性抵抗性遺伝子を有するが、ほ場抵抗性は十分でないため、いもち病の発生を認めたら防除する。白葉枯病に弱いので常発地での栽培は避ける。紋枯病にも弱いので発生状況に応じて防除する。

イ あきたこまち

地力が中程度のほ場に適する。倒伏しやすいので地力の高いほ場では施肥量に注意し、大豆跡や野菜跡での栽培は避ける。

いもち病に弱いので防除を徹底し、常発地での栽培は避ける。

ウ ひとめぼれ

やや倒伏しやすいので、多肥栽培は避ける。

種子の休眠性が強いので、催芽前の浸漬は十分に行う。

いもち病にはやや弱いので、いもち病の適期防除に留意する。

エ ヒノヒカリ

平坦部の地力が中程度以上のほ場に適する。熟期が遅いため、秋冷の早い地域では登熟不良となる可能性がある。また、最高分けつ期から幼穂形成期までの期間が長いので、この間に極度に葉色を落とさないよう稲体の栄養維持に留意する。